２０１５年新年号・季刊４８号

ミンダナオの風

発行：ミンダナオ子ども図書館　松居友

夕暮れの、電気も無い、マノボ族の集落
でも子どもたちは、学校鞄をおくと
みんな家から飛び出してきて
ゆうぐれまで、なかよく遊ぶ。
伝統的なハンカチおとしや、おにごっこ
後ろの正面、だーーーれ！
バスケットだって、ただのボール遊びさ。
学校の体育館やコートでする、サッカーや野球は
大人が作ったルールのなかで
勝ち負けを競い合うゲームにすぎない。
遊びは、楽しみながら友情をつちかうもの。
学校でも幼稚園や保育園でも無く、
野原や森や路地裏といった、
家や学校の壁や垣根の外側の
ちまたと呼ばれる場所でするものさ。
そここそが、ぼくたちの自由な空間！
こうした場所でこそ、ぼくらの心は解放されて
競争原理からも自由になって
家庭や教育からも解き放たれて
真の友情と社会性を培う心が養われる。
友情と愛こそが生きる力！
子ども時代に、ちまたでの友愛体験を持てずに、
勝つことばかり考えて、育った大人は恐ろしい？
日本では、ちまたで遊ぶ子どもたちの姿を
見なくなって久しい。
ミンダナオの子どもたちと、
日本の子どもを比較すると、
ちまたでの遊びの欠如、真の友愛体験の欠如が
生きる力を喪失させて、自殺と引きこもりを
生んでいるように思えてならない。
お金と物は豊かでも、日本の子供たちがかわいそう！

Mindano Children's Libary Foundation, Inc.
MCL
SEC REG.NO.CN200315083

日本の子どもたちを視野に

ミンダナオ子ども図書館（ＭＣＬ）を始めてから11年目に入った。

今までなんの罪も負い目も無いにもかかわらず、貧困や戦闘のなかに追いこまれ、困窮しているミンダナオの子どもたちの事だけを考えて活動してきた。あっという間の10年だった。

最近、日本も真の意味での国際化を考え始めたせいか、若者たちの訪問希望が増え始めた。はっきり言って政府の指定する危険地域でもあるし、現地を知らない若者たちの面倒を見るのが大変なので、なるべく避けてきたのだが、訪問して、ＭＣＬの子どもたちの歓迎を受けると、激しく泣き出し、その後、山の村での体験を通して、落ち込んでいた気持ちが回復されて、人生に生きる希望と夢を持つ子たちが、たくさん出てくることがわかってきた。

逆に講演会で日本を訪れると、今の日本の子どもや若者たちの心の貧困の激しさに絶句する。沢山の自殺や引きこもり、そして登校拒否から精神障害。

これは放っておけない、ミンダナオの子たちの生きる力を伝えなければ！

日本の子たちを視野に入れて、執筆、講演、交流を進めなければ・・・！

松居友

図書館に暮らす

宮木　梓

ミンダナオ子ども図書館で暮らすようになってから、2か月が過ぎた。図書館から出かけて、図書館に帰ってくる。図書館が、今の私の家だ。

私は本が好きなので、「図書館」という響きから連想されるイメージは、とてもいい。ここに来るまでの、私の図書館のイメージは、少し薄暗くて、たくさんの本がシン、と並んでいる、静かな、落ち着く場所だった。だから、もし図書館に住む人々がいれば、窓際の陽だまりの、本棚の影に隠れて、こっそりとお気に入りの本を眺めているだろう、と思った。

私の支援している子といっしょ

ミンダナオ子ども図書館は、南国の太陽に照らされて、明るい。そして、図書館に住む、１００人くらいの子どもたちの歌声や歓声や、果物の木々が風に揺れるざわめきや、ニワトリの鳴き声や、たたきつける午後の夕立の音で賑やかだ。

それでもここは、図書館で、３つある建物みんなに本棚がある。

私の好きな本棚は、食堂の2階にある本棚で、絵本がたくさんある。色とりどりの、字体もさまざまな絵本の背表紙の前に座っていると、ドキドキする。絵本は、山の動物たちや、海のお魚、天のお星さまや、鬼、魔法使いの住む不思議な世界の入り口なので、いったいどこに連れていかれるのだろう、と思う。

時々、小さい頃のお気に入りに出会うこともある。お話自体は覚えていなくても、絵本のなかの風景や、読んでもらったときに感じたことを思い出す。

そして、ようやく1冊を選び出して、本棚から抜き取る。床にぺたんと座って、表紙を開こうとすると、子どもたちが寄ってくる。

「これ、読んで」

「これも読んで」

「その次はこれ」

私の選ぶ絵本は、日本語の絵本が多いから、日本語で読んで聴いてもらう。ことばが分からないから、と、途中で

みんなでごちそうを作るのは、とっても楽しい

どこかに行ってしまう子、絵をじぃっと見つめている子、まだ読み終わっていないのに、どんどんページをめくろうとする子、日本語の音を聴いている子、ビサヤ語に訳して話して、と言う子など、反応は様々だ。一人で黙って絵本を読むのと、口に出してお話を聴いてもらうのは、だいぶん違う。

子どもたちも、私によく絵本を読んで聴かせてくれる。日本語や、英語の絵本の絵を見ながら、ビサヤ語でお話をつけてくれる。私のビサヤ語は、読んでくれる子どもたちよりも年下の、まるで赤ん坊なので、お姉さんやお兄さんにお話をしてもらう様な、そんな気持ちでお話を聴く。

お話を読んでもらうのは、とてもうれしい。絵だけを見てお話を聴いていられるし、ビサヤ語が完全に分からないのもあって、絵がお話を語りだす。自分で絵本を読んでいるときには、意外に絵を見ていなかったことに気がつく。

文章で、ビサヤ語を聴けることもうれしい。会話で感情を表したり、単語を覚えるのとは違う表現を聴かせてもらえる。小さかった頃、毎晩寝る前に、母が私と妹に1冊ずつ絵本を読んで聴かせてくれた。日曜日の朝には、父が即興で作ったお話を聴かせてくれた。ほんの小さな頃、両親から日本語の音をもらった様に、今、子どもたちにビサヤ語の音をもらっている。

10月に、山の村に読み語り行くのに連れて行ってもらった。お話を語る高校生の奨学生たちにとって、ものすごく楽しいことらしく、絵本を選んだり、晩御飯のあと、歌や劇の練習をしたりと大騒ぎだった。

最初は恥ずかしがって、家に隠れていた山の村の子どもたちだけれど、奨学生がお話を語りだすと、みんな身を乗り出して聴いていた。

語るのがとても上手な女の子がいて、普段一緒に過ごしているのに気が付かなかった一面を見せてもらえた。

私たちは図書館に住んでいるけれど、様々なお話を運んでいく奨学生や、その前でワクワクしている小さな子どもたちを見ていて、私たち自身がまるで図書館のようだと思った。

高校生の女の子たちが、先月号の季刊誌を出す封筒に切手を貼るのを手伝ってくれていたとき、「私の、ミンダナオ子ども図書館での一番楽しかった思い出の一つは、読み語りに行ったこと」と話しているのを聞いた。親を亡くしていたり、見捨てられていたり、満足に食べらなかったり、事情があってここに来た子どもたちだけれど、ここは孤児院ではなくて、図書館だ。

両親や家族と過ごせるのが一番だけど、図書館でみんなと一緒に暮らすのも楽しかった、と感じてもらえればうれしい。

私は、図書館に住んでいるって、何て素敵なことかしら、と思っている。

テレビで放映された「なぜここに日本人」を、ミンダナオ子ども図書館の映像サイトに掲載しました。

「ミンダナオ子ども図書館だより」http://www.edit.ne.jp/~mindanao/mindanews から、映像サイトに入れます。

日常から見つかる たくさんの幸せ

秀島　彩女

早寝早起き、水浴び、フィリピンタイム、手で洗濯、ドリアン、いろんな初めてや驚きが、約3か月たった今私にとって普通のことになってきた。日本に帰った時、日本タイムに合わせるのが大変そう。

こどもたちとの生活は、相変わらず楽しく、嬉しいことも悲しいことも楽しいことも、一緒に共有することができるって、とても幸せだなと感じる。

また今回記事を書かせてもらうチャンスをいただき感謝。今回は、子どもたちとの生活での大きな気づきと嬉しかったことを、書こうと思う。ある一人の男の子との出来事だ。

彼は19歳、両親は無く家庭の事情からか、学校へ行くのが遅れたために、まだ小学6年生。クラスメートは11歳、12歳と自分より幼い子ばかり、自由に使えるお金も十分にはなく、経済面でもとても苦労している彼。

卒業式まであと3か月という時に、彼は勉強をやめて働きたいと、私たちに相談をしに来たのだ。まずは自分のことを支えてくれている支援者に、そのことを相談したい、と。

確かに同級生は自分の弟や妹と同じ年頃、それに働いて収入を得たほうが、今よりも食べたい物も食べれる、そして買いたい物も買えるだろう。でも彼にとって今必要なものは「教育」だ。将来いい仕事につくためにも、これから自分の力で生きていくためにも。

いっしょに洗濯、本当に楽しい

私は、彼の過去を知らない。私が感じたこともない痛みや苦しみを乗り越えて、これまで生きてきたに違いない。私が口で言うことは簡単なのはわかっている、けれどそんな彼だからこそ、私はここで諦めないでほしいと思った。諦めずに乗り切ることで、自分に自信をつけてほしいと。そして、全ての子どもたちにチャンスがあるわけではないことも、知ってほしかった。

今でもダバオ市の方に行くと、学校に行けず道路を歩き、道行く車の窓の側で物乞いをする子どもたちを、私はたくさん見かける。

そんな中彼は、MCLのスカラーとして、日本の支援者のかたからサポートを受けて、学校へ通い勉強をすることができている。そのチャンスを、自分で失うことはしてほしくなかった。

また会おうね。わすれないからね。

私もたくさん彼と話をしたし、ハウスペアレント（子どもたちのお世話係さん）の説得もあって、続けることを決めてくれた。その時に私は彼に、「絶対あなたの卒業式にいくから、そして写真とるんだから！！

今諦めないで！あなたならきっと大丈夫だから」っと伝えた。

最終的にはハウスペアレントさんと私は彼と卒業式の後にJolibee（人気ファーストフードレストラン）に行く約束を、笑って交わすことができてほっとした。そして最後に彼が私にいってくれた言葉は、これからもずっと覚えているだろう。

「ありがとう何があっても僕はもう諦めない、頑張るよ！」

その時はとても嬉しくて、自分がここにいる意義が一つ見えた気がした。これからもこんな私だが、1人でも多くの子たちを支えたいと強く思う。

日々の活動を、豊富な写真で、随時更新報告しているＭＣＬのサイト
http://www.edit.ne.jp/~mindanao/mindanews
ウエッブサイト検索『ミンダナオ子ども図書館』、必見です！

もうひとつここにきていいなと気づいたこと、それは「停電」。

ここMCLがあるKidapawanはよく停電する。お昼、夜、短い間停電することもあれば3～4時間停電することも。夜停電した時はとりあえず真っ暗。

初めは嫌だなと思っていた停電、母に「また停電で大変だったよっ」と伝えると、「停電で困るのってパソコン使えなくなるあやめちゃんだけじゃない??」と言われて、確かに・・・図星だった。

その日から私は停電した時は、いつもしないこと、停電したからこそしかできないことをやろう、子どもたちはどんなことをしているのか見てみることにした。

わかったこと、停電した瞬間はみんなキャーキャー言っているけど、少し時間がたつと暗さにも慣れてきて、いつも感じることができない感覚を感じることができるのだ。

あたりは虫、動物の鳴き声、自然の音、ホタルのひかりと星の光だけ。地面に寝転がって、満点の星空をみんなでただただ眺める。時々大きな流れ星が目の前を通り過ぎていく。

みんなで水浴び

こんなにただ星を眺めるのが素敵なことだったとは！これほどすがすがしい気持ちになれる瞬間は日本ではなかなかないな、と思った。

そしてもうひとつ停電のいいところ

それは、キャンドルをともして、いつも話せない子とゆっくり話ができること。家族の話や将来の夢、不安なこと、これまで聞けなかったこと知らなかったことも、二人で同じ時間を共有することで知ることができるのだ。

これからも自分のことを知ってもらうのと同時に、もっともっと子どもたちひとりひとりのことを知っていきたい。日本にいると感じることのない気持ちや世界観を感じる日々、一日一日を大切に過ごしていこうと思う。

川に洗濯に向かう少女

最後に支援者のみなさまへ、いつもあたたかいご支援ありがとうございます。

スカラーの支援をしてくださっている方に伝えたいことは、ほとんどの子どもたちが、自分の支援者の方の名前をちゃんと憶えていて、日々感謝の気持ちを忘れずに過ごしているということです。

これからもそんな子どもたちをどうぞよろしくお願いいたします。みなさまの心温かいご支援が子どもたちの未来を明るいものにしています。

メール：mcl.v.staff@gmail.com（現地日本人スタッフ）

電話番号：080-4423-2998（日本国内から現地に転送・松居友）
09219603640（現地携帯電話フィリピン使用・松居友）
mcltomo@yahoo.co.jp（松居友へメール）

日本の子ども ミンダナオの子ども

松居友

比較することは、あまり好きでは無いのだけれども、日本の子どもたちとミンダナオの子どもたちを比べてみると、生きる力は圧倒的にミンダナオの子どもたちが優っている。

生きる力って、何だろう。

厳しい競争に勝ち抜くこと？

他人をけおとしてでも、自己実現を成就すること？

リーダーになって人の上に立ち、指導力を発揮すること？

ミンダナオの子どもたちは貧しくて、三食たべることすら大変で、場合によっては小学校を卒業することも困難だから、社会的に高い地位について指導力を発揮しようと夢見ているようにも思えないし、他人をけおとしてでも競争に勝ち抜いて、自己実現しようとしているようにも思えない。

早朝に、父さんと母さんが、山に仕事にでかけるときには、長男は親につきそって力仕事にいっしょにいくし、長女は末の赤ちゃんを背に抱いて、終日子守。次女は、料理と家の掃除。三女や次男やその下の子たちは、水くみや森での薪探し。それがおわると子どもたちは協力して、タライのなかにたくさんの洗濯物をいれて、はるかしたの川や沢にまでおりていって、洗濯したりしてすごす。

そんなわけで、学校に行けるのは、兄弟姉妹のなかでも、5番目ぐらいの妹が多く（男の子たちは力仕事）家族みんなで働いて、一人でも小学校を卒業させようとこころみる。

かわいい私の大事な弟と妹

そんなこともあって、MCLのスカラシップに応募しようとする子たちの、応募理由の99パーセントは、「自分が学校にいって、少しでも良い仕事について、両親を助けたい。妹や弟を、学校にいかせてあげたい・・・。」

そんな貧困状況なら、人生に夢も希望もなく、さぞかし気持ちが暗いだろうとおもうと、それが全く逆で、訪問した日本の若者たちもびっくりするほど、表情はゆたかで明るいのだ。

バナナを運ぶのは僕のやくめさ

川に洗濯にいくときは、村の他の子たちもみないっしょ。おしゃべりしながら楽しくやるし、干しおわったら川に飛びこんで遊びながら自分を洗濯！

料理も、蛙をとったり煮こんだり、ごちそうの鶏をつぶすことから、芋掘りもおしゃべりしながら楽しくやる。

MCLでも、料理をするのは子どもたち。朝4時半には起きだして、みんなで楽しく食事をつくり、その後は、掃除や洗濯、庭いじりから野菜そだてまで、みんなで楽しくやっている。

そのような子どもたちの姿を目のあたりにして、日本から訪れた人々は驚く。「孤児だったり、問題家庭の子たちだったり、戦争やアビューズなど、背景をきくと想像を絶する状況からきた子たちなのに、なんでこんなに明るい

洗濯のあとは、みんなで水浴び

いの？」

ミンダナオの子たちの特徴は、困難におちいっても、家庭が崩壊しても、親が戦争で殺されたり、貧困で家族が崩壊してたとえストリートチルドレンになったとしても、自殺したり引きこもったりすることなく、笑顔をわすれずに生きていくこと。

逆に日本では、子どもや若者の自殺や引きこもりがまんえんしている。

子どもだけではなく、大人や老人の自殺や孤独死もおおい。講演会で日本にゆくたびに、人々の顔が暗くけわしくなるばかりか、東京ではたえず電車が停車して人身事故が報告される。理由はなんと、飛び込み自殺！

ご飯づくりは、ぼくらの仕事。もうすぐ食べられるよ。

地方は地方で商店街は閉鎖して、街に人通りがまったくない。公園ですら子どもが遊んでいるようすもなく、本当にさびしい世界になってしまった。

急速に子どもの数がへったということは、少子化政策が成功したという事だろうけど、結婚した大人の視点からみるならば、子どもを産んだとしても、保育所にあずけて育ててもらうのがせいぜいで、我が子が幸せに成長できる環境が、ちまたにないことが実感されて、生まない方がましだと考えているせいだろう。結婚を望まない若者たちも激増している。さらに追い打ちをかけているのが、教育費と医療費の高騰だ。

いつでも遊びにおいで。待ってるからね！

子どもが幸せに成長できない社会、楽しくそだっていく事ができない国に未来はない。なぜなら、子どもこそ未来だから！

ミンダナオは、たしかに貧困率が高いし、戦争などの問題もあるのだが、子どもにかんしていうならば、町でも山でも農村でも、子どもを見ない場所はないし、しかも明るく生き生きとしている。この違いはいったいどこからくるのだろう。

ミンダナオに足をふみいれてから15年、MCLを設立してから11年。戦争や作られた貧困のなかで、あえぐ家族や子どもたちを見ていたたまれずに、読み語りと同時に、教育、医療の活動をおこなってきたが、それにつけても近年気になりはじめたのが、日本の子どもや若者たちの心の病や、子育てに悩み苦しむ母親たちの切実な告白。精神疾患の問題は、子どもや若者たちだけではなく、出社できない中高年から、一人暮らしの老人たち、ひいては貧困の中に取り残された母子家庭にまでおよんでいる。

君たちもいっしょに食べない。おいしいよ。

かつてやっていた絵本や童話や評論の執筆も、ミンダナオの子どもたちとの出会いと感動に圧倒されて、この一〇年ほど、ほとんどせずに過ごしてきたが、その間の日本人の心の変わりようには唖然とせざるをえない。

今考えているのは、「どうしたら日本の子どもたちに、ミンダナオから救いの風をおくれるか！」という事。

水をくむのは、わたしたち子供のお仕事

テレビで放映された「なぜここに日本人」を、ミンダナオ子ども図書館の映像サイトに掲載しました。

「ミンダナオ子ども図書館だより」http://www.edit.ne.jp/~mindanao/mindanews から、映像サイトに入れます。

ミンダナオで再婚し、小学校の4年と5年の実の娘を育てているが、MCLで、親のいない子や崩壊家庭の孤児たち90名あまりといっしょに暮らしてきているせいか、娘たちは放っておいても実にのびのびとそだっている。

MCLにいると、「子育て」という言葉がへんに感じる。「子育つ」というのが本当で、ちまたで遊び友情をはぐくむ体験があれば、子どもたちは自然にそだっていくものなのだ。

「子育ての責任は、家庭にある。特に母親の役割は大きい」などという言葉に、違和感を感じるのはぼくだけだろうか。子育ての責任が親や家庭にあるばあい、親がいなくなったり家庭が崩壊した子どもたちは、どのように育ったら良いのだろうか。

また、子育ての責任は、保育者や学校の先生にもある、という考え方もここでは奇妙に感じられる。もしそうだとしたら、保育園にも学校にもいけず、教育もうけられない僻村の子たちは、育てられなかった子たちなのか！

先日、アジアの孤児施設をめぐっている日本の人たちが、MCLを訪れた。曰く「ここの子どもたちは、本当に他の施設の子どもたちとちがいますねえ。施設にいながら、こんな明るい子どもたちをみるのは初めてです。なぜこんなに明るいのかなあ？」

ぼく答えた。「ここは孤児施設ではないからですよ。」

ぼくは孤児院をつくろうとも、施設を運営しようともおもったことは無いし、他の施設をほとんど知らない。ただ、困難な状況にある一人一人の子どもたちをみるにつけて、放っておけない、何とかしたい・・・。そんな思いで活動してきたら、自然とこんな形になってしまった。もちろんここには、母親役のスタッフたちもいるが、彼らとてもとは奨学生で、必要なときには助言や指示をあたえるものの不必要な干渉はしない。

子どもたちのとって大切なのは、愛をもって見まもり、ときどき抱いてあげたり愛情のある言葉をかけてあげること。そしてなによりも大切なのは、自由にのびのびと遊べる環境をととのえてあげ、将来の夢をもてるように導いてあげることだとつくづく思う。

まるで機関車が煙を噴いて走りぬけるように、高度成長期をひたすら走りつづけてきた人々は、成長期がとまり、老齢化して、自分の事は自分で出来なくなり始めると、落ちこむどころか精神的にパニックをおこしはじめる。

「日本で自殺が多いのは、個人主義が行き過ぎたからでは無いだろうか」と、マニラの修道士が話してくれた。

「個人が尊重され過ぎる競争優先の社会では、協調の心がうしなわれて、孤独な人が増えていく」

自分の力で走れなくなった老人は、施設のベッドにしばりつけられたまま死をまつ以外に方法はないのだという。それもお金があればの話で、一人暮らしの孤独死も多いのだそうだ。

ミンダナオでは、MCLでも同様だが、上のお姉ちゃんが下の子に、「ねえ、そこのお店でお塩をかってきてちょうだい」といえば、たとえ夢中で遊んでいる最中でも、下の子はさっとたちあがり、明るい笑顔で、「はい」といって買いにでかける。

お姉ちゃんがいったことに、下の子たちは笑顔でこたえ、ちっともいやな顔をしないのは驚きだ。そのかわり、お姉ちゃんは、きちんと下の子の世話をしてめんどうをみる。

もちろん、お年寄りを一人孤独にほうっておくなど、考えられない。妻のエープリルリンのおじいさんもおばあさんも、当時まだ小学生だった彼女の膝のうえで亡くなった。

「自分の力できりぬけろ」という言葉への現地の子どもたちの返答は「でも自分の力なんてたかがしれている、みんなでやるほうが、楽しいよ。」

「自分のことは自分でやれ」への返答は「一人で出来ないことなんて山ほどあるよ。みんなで力をあわせるほうが大事だよ。」

「日本では、自殺する人が多いんだよ」というと、子どもたちはびっくりして「なんで自殺するの？あんな豊かな国なのに！」「孤独で死ぬんだよ」というとさらに驚く。「孤独で死ぬってどういうこと？」

ＭＣＬの子たちは、親がいなくなって一人取り残されても死のうとしない。どこかで誰かが助けてくれるから！

一人ストリートチルドレンになっても、必ず別のストリートチルドレンがやってきて言葉をかける。

「俺たちの仲間になれよ。」

日本では、孤独な母子家庭がふえている、という話をすると、「近くの人たちといっしょに住んで、いっしょに食べたら良いのに、なぜしないの？」

子どもの貧困が増えている話をすると、「自分の家によんで、自分の子にしたら良いのに。ＭＣＬみたいに！」

こういった言葉が自然にポンポン飛びだしてくる。

経済的な貧困で大変なのが、医療と教育。でも日本もＭＣＬのように、医療と教育を無償にして生活を保障すれば、子どもをたくさん産んでも何の問題もないはずだ。それどころか、生活の喜びが倍増し、地方も活性化するだろう。

ミンダナオのように、子どもが学校を引けたら、親の職場に直行し、職員もお客も大喜びで子どもに声をかけてむかえたら、親も子育てが楽しくなる。

ＭＣＬみたいに（地方都市の役所や銀行でもそうだが）、職場に子どもたちがはいってきたら、「・・・ちゃん。おかえりなさーい」といって、母親の仕事机の横にござをひいて昼寝をさせたり、工場の修理工の後ろでも、木の長椅子をおいて、そこで妊娠中の奥さんがごろ寝をしている風景があれば、仕事場と家庭の壁もくずれて社会は生き生きとしてくるだろう。

個人と社会、家庭と会社、保育園や幼稚園、学校と家にしか、意識が向かない思考は閉じこもりの壁型思考だ。

その中間に存在する曖昧な場所。「ちまた」こそが壁をときはなち、人々の心を解放し孤独から救う場所。ちまたで、子どもたちがおおぜい生き生きと遊んでいる姿をみることがない国は、本当にさびしい。

個人と個人の間に存在しつつ、人をささえるのが愛だとすれば、ちまたこそ愛と友情の空間。

妖精のように存在していても見えない友と愛の力こそが、人々を幸せにし、生きる力をあたえてくれる。

支援者の無い子の情報を知りたい方は、
サイト「ミンダナオ子ども図書館だより」http://www.edit.ne.jp/~mindanao/mindanewsから、
「まだ支援者の無い子たちの紹介サイト」に。パスワードはmindanao。そこからメールで連絡もとれます。

日本の子どもや若者たち、中高年の方々との かけはしを作る試み

ＭＣＬが現地法人の資格をとって１０年間というもの、ミンダナオの子どもたちの事のみを視野に入れて活動してきました。しかし、最近になって、日本の若者たち、中高年の方々が、ＭＣＬを訪れ、感動され、生きる勇気をえて帰られる姿をみると同時に、自殺や引きこもりの多い日本の子どもたちの心の現状をしるにつけ、さすがに日本の子たちを放っておけない気持ちが強まりました。日本の方々の想いに答えるためにも、貧しくとも生きる力にみちあふれ、明るい笑顔のミンダナオの子どもたちの姿をつたえ、語り皆様方とともに考えることによって、微力ながらも何か出来ないかと考えるようになりました。

日本の人々を受けいれる以外に、何ができるだろうかと考えたときに、思いいたった一つの可能性は、絵本をはじめとして、児童文学や文化論の執筆をふたたび始めること。そして、かつてのように絵本や昔話の話に、さらにミンダナオの子どもたちから学んだ、遊びやちまたの大切さ、妖精や見えないものとの交流の重要性を加えて、新たな気持ちで講演を再開することでした。

本当は日本にいるとさびしくて、常時ＭＣＬに滞在したいのですが、老齢になっている両親の「そばにいて欲しい」という願いも聞き入れて（ミンダナオでは当然のことですが）、数年間は、日本滞在を４月５月、７月８月、１０月１１月、１月２月と増やして活動します。

この期間は、常時講演会にもうかがいますので、日本窓口か私宛に、ご連絡ください。

講演会、家庭集会など希望の方は、常時メールか電話、ファックスでお知らせください。

松居友メール：mcltomo@yahoo.co.jp　電話：080-4423-2998（日本および現地転送、松居友）

FAX：0743-74-6465　電話：090-5091-7514（日本窓口＊前田容子）

先日、日本での講演会の後で、子育ての終わった一人のお母様がやってきて、こうおっしゃいました。

「私の息子は、２５歳になりました。今はしっかりと自立して楽しみながら、自分の仕事をしています。

それにしても、２０年いじょう前ですが、松居友さんの絵本論、とりわけ昔話とこころの自立の話をきいていてよかった。とりわけ、父性や母性の影の部分としての天狗、鬼婆や魔女の話を聞いていたせいで、私も、子どもの成長とともに自立できたと思います。

それにしても、子どもが子ども時代にくりかえし読んで欲しいともってきた絵本と、大きくなってから「このお話が心に深く残っているよ」といっている絵本とが、ちがうのには驚かせられます。本当に、友さんが、『わたしの絵本体験』に書かれているとおりなんですね。」

本当に心に残る絵本が、売れないという理由で消えていくのは、さびしいかぎりですが、かつて３０代のときに出版した、『わたしの絵本体験』『昔話とこころの自立』『昔話の死と誕生』が、教文館から再版されましたので、読んでいただければ、真に心に残る絵本とは何かを、ご理解いただけるかとおもいます。

ただ上記の拙著は、３０年前の絵本編集者時代の執筆なので、絵本と昔話を中心にしたお話体験をテーマに執筆しています。が、本来子どもにもっとも重要なのは、家庭や園や学校から外にでた「ちまた」での遊ぶ体験であること、そこでこそ心の自立と成長と生きる力がえられることを新たに加え、ミンダナオの子どもたちの様子をまじえて講演で語り始めています。

４月に絵本「サンパギータのくびかざり」タガログ英語版を、寄付をっくださった皆さんがたにはお届けしますが、日本語版は今人舎から出版されます。ご期待ください。

サンパギータのくびかざり

生きる力で大切なのは、愛が死を超えていることを伝えること。そして、神秘的な力と、貧しくともコミュニティーのなかに宿っている、友愛の真実を子供たちに語ること。（４月、今人舎から出版）

寄付支援をくださった方々には、まいとし一回、季刊誌と同じ紙質ですが、MCL で制作した絵本の英語タガログ版をお届けしていきます。これは、絵本を見たこともない僻村の家庭に無償で配布するものと同じ見本版です。

童話：山菜売りの少女

続き

まわりにいた子どもたちが、顔を輝かせて話しだした。

「年一回、ムスリムの日、マノボの日、クリスチャンの日っていう、文化祭があるんだよ。」

「そして、平和の祈りとシンポジウム。」

「楽しいよー。」

「踊りを踊ったり、結婚式のまねをしたり。」

「お昼ご飯には、伝統料理を作ってたべるんだ。」

「イスラムのお菓子は、とってもおいしいよ。」

「豚は、イスラムの子たちがいるから、普段は遠慮して食べないけど、クリスチャンの日にだけは、豚の丸焼きを作ってもいいんだ。」

「テーブルを、別にすればいいんだって。」

「わたし、イスラム教徒だけど、クリスチャンの日には、カニのココナッツ煮込み、食べたよ。」

「マノボの日には、ニシキヘビの蒲焼！」

「カエルもとりに、山に行くんだ。」

ギンギンたちは、けさカエルを食べてきたことを思いだして、はずかしくなって、下を向いた。すると、浮浪者が助け船をだすようにいった。

「カエルをたべるからって、恥ずかしがることはない。マノボ族の伝統だからね。」

イスラムの男の子がいった。

「この村には、教会はたくさんあっても、イスラム教徒がお祈りするモスクがなかったんだ。そしたらねえ、日本のカトリックの人たちが、モスクを寄付してくれた。ぼくら、一日五回のお祈り、欠かせないからね。」

アオコイ酋長は、ストリートチルドレンにいった。

「君たち、よかったらぜひ参加してくれたまえ。」

奥さんが、あらためてギンギンたちの方を向くといった。

「学校までは遠そうだし。食事も大変そう。家にいたら、山菜売りのお仕事を、毎日しなきゃならなくて、学校もつづけられない。親の同意がえられれば、ここに住んで通う方がよさそうね。」

「お弁当も、持っていけるの？」ジョイジョイがいった。

子どもたちの一人がこたえた。

「すぐそこが学校だから、お昼には帰ってきて、あそこのポーチでみんなで食べるの。」

「一日三回、お米のご飯が食べられるなんて、夢みたい。」クリスティンがいった。

子どもたちが答えた。「朝早く起きて、ご飯を炊いて、おかずを作るの、わたしたちの仕事。」

「みんなで庭で、野菜も作っているよ。」

「お米を干すのは、ぼくら男の子たちのやくめさ。」

「ここのお庭も、わたしたちで作ったのよ。お花を植えたり、木を育てたり。」

「果物もとって食べるよ。ドリアンもマンゴスティンも、バナナもマーランもランブータンもあるよ。」

「おやつには、カサバイモを掘ってきて、バナナといっしょに蒸し焼きにするんだ。」

つづく

郵便振替口座番号　００１００　０　１８０５７
加入者名　『ミンダナオ子ども図書館』
購読料程度の自由寄付でも結構です。よろしくお願いします。

Mindanao Children's Library Foundation, Inc.

貧しいからといって、必ずしも不幸とは限らない
私たちの生活の方が、豊かな国の人々の生活よりも
はるかに美しいと感じるときだってある。
けれども、どうにもならないのが、
一日三食たべられないときと、
お金が無くて学校に行けないとき
病気になっても病院に行けないとき・・・

ミンダナオ子ども図書館支援方法

１、医療や読み聞かせ活動を支援して下さる方々へ・・・自由寄付（購読料のつもりで気軽に）
直接下記の振替口座にお願いします。寄付をくださった方には年五回、４、６、８、１０、１２月に季刊誌『ミンダナオの風』と、時に特別号で絵本やＤＶＤをお送りしています。
自由寄付は、一番根幹になる寄付です。年間１４０名を超える子どもたちの医療費、支援者がまだ見つかっていないにもかかわらず採用した、放っておけない子たちの学費（現在 190 名弱）、子どもたちの食費や生活費（ほぼ２５０名）。そして読み聞かせに行った場所で、絵本の無い子どもたちに無償で届ける絵本の制作などに使われます。
季刊誌を楽しみにしている方の場合、生活の厳しい場合でも、わずかな寄付でお送りします。
不要の方は、ご一報いただければ幸いです。

スカラシップ支援

ミンダナオ子ども図書館のスカラシップは、成績よりも親のない子、母子家庭や崩壊家庭の子、親がいても兄弟が多く学校にいけない子を採用の基準としています。その中の特に何らかの事情で現地に置いておけない子は、本人の希望と保護者の了解で本部に住み、生活を保障し、大学まで通えます。奨学生は現在６２０名。本部に住んでいる子は、ほぼ 100 名。

１，大学生スカラシップ・・年額７００００円　（月額５８３３円、下宿代を加算）

２，高校生スカラシップ支援の方へ・・年額６００００円（月額５０００円）
振り込み用紙の通信欄に「大学」または「高校スカラシップ」と書いて、振り込んでいただければ、年５回の季刊誌と特別号に同封して、本人からの手紙、６月に成績表、８月に写真、１２月に新年カードが届きます。新規奨学生の紹介は､随時プロフィールと写真をお届けします。文通やプレゼントも可能です。訪問の際は、自宅にご案内します。

３，里子支援（小学生）・・・年額４００００円（月額３３３３円）
振り込み用紙の通信欄に「里子」と書いて、一部振り込んでいただければ、季刊誌と特別号に同封して、８月に写真、１２月に本人が描いた新年カードが届きます。
新規里子の紹介は、随時プロフィールと写真をお届けします。訪問の際は自宅にご案内。
プレゼントも可能ですが、僻地のため、返事は半年ほど後になる可能性があります。

その他の支援

１、保育所・下宿小屋建設支援・・・４０万円（建設費と建設後の修理代）
振り込み用紙の通信欄に「保育所」と書いて振り込んでいただければ、年五回季刊誌と同時に毎年１０月には、現状を写した写真をお届け。開所式参加や訪問も可能。数年ごとに修復。

２，植林環境支援・・・６万円（ゴムの木６００本、１ヘクタール、現地作業代を加えました）
洪水対策と先住民族が土地を手放さないようにするための、自立支援です。

３、古着支援等・・・ウエッブサイトの支援方法をご覧ください。

詳しくはウエッブサイト参照「検索：ミンダナオ子ども図書館」
http://www.edit.ne.jp/~mindanao/mindanews

ゆうちょ振り込み口座　00100-0-18057：加入者名　『ミンダナオ子ども図書館』
（インターネットバンキングも可能です）■銀行名　ゆうちょ銀行　■金融機関コード　9900
■店番　019　■預金種目　当座　■店名　〇一九 店（ゼロイチキユウ店）　■口座番号　0018057

スカラシップ・里親に関する質問、現地訪問、季刊誌停止その他に関する問合せは、
メール mcl.v.staff@gmail.com（日本人現地スタッフ）
Fax 0743 74 6465 / 電話：090-5091-7514（日本窓口、前田容子）
電話番号：080－4423－2998（日本および現地転送・松居友）メール：mcltomo@yahoo.co.jp
現地住所：Mindanao Children's Library Foundation, Inc.
Brgy. Manongol Kidapawan City North Cotabato 9400 Philippines